豊崎中

「確かな学力の向上を目指し、見通しをもって学習に取り組む生徒の育成はどうあればよいか」

（３年計画の２年次）

校長　　鈴　木　　悟

１　研究主題について

前年度の研究の成果と課題は以下のとおりである。

(1) 研究の成果

①「発信し、つなげる」をキーワードに、全教員が道徳の授業と教科の公開授業を実施することにより、教師間の指導力の向上と授業改善が見られた。

②自力解決と対話交流の場やTo Doリストの活用により、生徒たちの学び合いと気づきを大切し、お互いの自己有用感を高め、見通しをもちながら校内行事や探究学習に取り組んだ。

③導入や発問の工夫、課題設定の工夫、ICTの活用等により、生徒は「わかった、できた、身についた」を実感し、主体的に学習に取り組むようになった。

(2) 研究の課題

①個別の学習支援が必要な生徒に対して、全職員で個々の生徒の特性を生かして、段階的に支援体制を築き、基礎的な知識・技能を習得させる必要がある。

②「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化を図るために、１人１台端末の効果的な活用法が主体的・対話的で深い学びにつながるよう具体的な取組について研修を深める必要がある。

③将来の夢や志の実現に向けて、生徒たちが目標を抱き、具体的に行動しようという意識を高めるために、３年間を見通したキャリア教育の実践の必要がある。

２　研究のねらい

確かな学力の向上を目指し、見通しをもって学習に取り組む生徒を育成するため、各教科・領域の特性を踏まえた授業改善を具体的に進め、生徒が主体的に学びに向かうための指導法を研究する。

３　研究仮説

(1)発問の工夫と見通しをもったわかる授業を展開することにより、基礎的な知識・技能を身につけることができる。

(2)学習課題を明確にし、協働的に学び合う場面を設定することにより、表現力や思考力を高めることができる。

(3)生徒間で話合い活動をさせることにより、自ら主体的に学ぼうとする意欲や態度を育成できる。

４　研究内容

(1)確かな学力を育むために、教師の授業力の向上を図る。

ア　授業の導入や教師の発問を工夫することで生徒の気づきを喚起する。

イ　ユニバーサルデザインについて、全教員が実践内容を共通理解して授業を行う。

ウ　ICTを活用し、わかる授業づくりを推進する。

(2)話合いを基に一人一人の考え方や意見をつなげ、お互いの「自己有用感」を実感させる。

ア　インプットとアウトプットを積極的に行わせ、自分の考えを確かなものにさせる。

イ　興味・関心を高め、問いをもたせるしかけを工夫し、探究的学習に取り組ませる。

ウ　自力解決の場と対話・交流の場を通して、他との調和を図りながら自分の考えを述べることを意識させる。

(3)夢や志の実現に向け、自己の未来を創り出すことができる生徒の育成を図る。

ア　全校道徳やキャリア教育を推進することにより、将来の理想の実現に向けた具体的な目標を考えさせる。

イ　個々の特性を生かした学習がなされるように、全職員で個別支援の充実を図る。

ウ　基礎的な知識・技能を生かし、自ら問題解決に取り組もうという意識を育てる。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

月	日	学年・授業者等	全体会等
6	２１	授業研究・全校道徳（３学年担任）	
9	１４	授業研究・全校道徳（２学年担任）	
9	２７	授業研究（計画訪問）	
１０	２５	授業研究・全校道徳（１学年担任）	
１１	下旬	授業公開（オープンクラスウィーク１）	
１２	上旬	授業公開（オープンクラスウィーク２）	
1	下旬		授業公開全体会（成果と課題）

(2) 一般研修

月	日	例）内容・講師・概要等
4	3	校内研修：今年度の校内研修について
4	２５	「研修主任会」にて示された「授業づくり」について
5	1	市教育研究指定授業　特別支援教育講演会 講師：山形大学大学院教育実践研究科　教授　三浦　光哉　氏
5	３１	要請一般研修：「個の『問い』の探究を深めるための対話的学習活動・振り返り活動」　講師：主任指導主事　馬渡　正仁　氏
１０	２３	要請一般研修:「基礎的基本的な知識技能の習得のための個別の学習支援」 講師：主任指導主事　馬渡　正仁　氏

６　研究の成果

(1)　教育指導課要請訪問一般研修支援を活用した校内研修を２回実施し、教育指導課主任指導主事馬渡正仁先生より講義をいただいた。「問題解決的な授業を展開するために、ズレを意識させること」、「個別の学習支援の在り方や自立した学習者を育てる働きかけ」について、教師全員が見識を深め、授業力向上につなげることができた。

(2)　日々の研究を集約する場の一つとして、教育指導課・市総合教育センター訪問での授業に焦点を定め、各教科において、「『ズレ』を意識させる導入」、「『立場の表明→対話的活動→立場の再表明(思考の変容の自覚)』というながれの展開」を可能な限り取り入れて授業を行うことができた。また、オープンクラスウィーク（相互授業参観週間）について、授業者の了解のもとに自由に授業参観し合える体制を整え、気軽に研鑽し合える機会とすることができた。

７　研究の課題

(1)　問題解決的な学習において、生徒が自分自身の変容を自覚し、「わかった、できた、身についた」と実感できるような学習活動・授業展開の在り方を探究していく必要がある。「『問い』を引き出す工夫」、「『問い』の意識を持続させる学習活動の工夫」、「支援の手立ての工夫」、「生徒個々の考えを深める対話的・協働的学習活動の在り方の模索」などを通して、生徒の「確かな学力」の形成につながる授業の実践を図っていかねばならない。

(2)　学習課題に対して、生徒自身が解決に到る道筋を思い描き、段階を追って探究する「見通しをもった学習」のなされる授業を展開し、生徒の「主体的に学習に取り組む姿勢」を高めていかなければならない。また、その学習の動機となる「問い」をもたせるために、授業の導入部分において「ズレ」を感じさせるように働きかける工夫をしていかねばならない。

(3)　「基礎的・基本的な学習内容」を確実に理解・定着させていくために、特別支援教育の視点に立って生徒の学習状況を把握し、生徒のつまずきに対する支援を適切に行っていく必要がある。そのために、学習評価の方法や評価結果の学習指導への反映のしかたを研究していかねばならない。

(4)　生徒が、他者との対話を通して個の思考を深めることができるよう、１人１台端末を意見・考えの可視化の手段として活用していくことを図っていかねばならない。そのために、教員間で１人１台端末活用の手法について情報を交換・共有し、研鑽していく体制を構築する必要がある。

（記入者　四戸　壮一郎）